

カントの最高善とは何か

エングストロームの解釈から

中野愛理(慶應義塾大学)

本発表の目的は、カントの最高善概念を二つの関連し合う問いから分析することである。

第一の問いは、最高善の導出過程に関わる。すなわち、いかにして徳と幸福の統一としての最高善が実践理性の目的となりうるか、という問いである。言い換えれば、最高善の概念は、幸福の度外視を命ずる定言命法と衝突しないのか、なぜ個人の幸福を度外視した道徳的行為によって、個人の幸福が結果することを同時に目的とすることができるのか、という問題を扱う。この問題に関しては長い研究の蓄積がある。例えば、最高善の概念が定言命法の諸定式からは導かれえないのではないかという疑義は1960年にベックによって提起されていた。(Beck 1960, 244f.)さらに、近年刊行された最高善をテーマとする論文集(Höwing 2016; Aufderheide 2015)においても幸福が最高善に含まれるかという問題を論じたものが複数存在する。

『たんなる理性の限界内における宗教』(『宗教論』と略称)によれば、最高善は、そこからカントの宗教論の全ての要素が導出されてくる基礎概念である。(『宗教論』6: 8)もし最高善が理性の必然的目的でなければ、魂と神の要請を含めた宗教的道具立ての全ては、カント哲学のうちに内在的位置付けを持つのではなく、単に歴史的・偶然的な要素に過ぎないものとなる。このように、最高善がどのような根拠から、どのような過程で導出されるかを解明することはカント倫理学のみならず、宗教論全体に関わる問題である。

本発表が取り組む第二の問いは、最高善の規定に関わる。すなわち、実践理性が義務として命じるのは、世界における最高善か、人格における最高善かという問いである。カントは、『実践理性批判』では人格における最高善の達成を義務とみなしながら、『宗教論』では世界における最高善の実現を義務とみなしているように見える。(Pogge 1997)カントは、正確には、いずれの理念の実現を義務と考えていたのか。そしてまた、両者の概念は互いにどのように関係しているのか。

世界・人格における最高善概念の区別に着目した研究はさほど多くない。しかし、この問題は重要である。なぜなら、この区別はカント倫理学の究極目的が何かという問いに直結するからである。例えば、カントの公共体論は、ロールズの『正義論』以来よく論じられてきたが、その際、カント倫理学の究極目的が、「法整備が完全に正義にかなった世界の実現」であるのか、「最高善を体現する人格そのもの」であるのかは現在まで論争の渦中にある。コースガードを含む多くの解釈者が最高善を世界におけるものとみなし、その観点からカント倫理学を解釈している。(Korsgaard 1996; Payne & Thorpe 2011)しかし、これらの解釈はカントが『宗教論』の全篇を通して、人格における最高善の実現可能性を確保しようとしたこと、及び理想的国家の整備の他に、道徳的陶冶を目的とした公共体の設立を人類の義務とみなしていることと符合しない。(『宗教論』6: 98)このことから、カントの最高善の構想は、第一義的に人格におけるものであると推測することができる。しかし、依然として、世界・人格における最高善概念の関係性は不明瞭である。

以上の二つの問いを検討するために、本発表では、エングストロームの最高善解釈を敷衍し、それを批判的に検討するとい

う方法をとる。それは以下の理由による。

エングストロームは、90年代から現在に至るまでカントの最高善概念を研究している。1992年の論文では、道徳法則から徳と幸福の統一としての最高善が導かれる過程を、自己愛という概念を用いて説明している。(Engstrom 1992)また、1997年には実践的知識という独自の観点からカント倫理学を分析し、その分析に基づき、2016年には、幸福が最高善に含まれる理由を説明している。(Engstrom 1997; 2016)このようにエングストロームの研究は、カントの最高善概念の構造を哲学的に解明するものである。しかしこれまでの日本のカント研究には、エングストロームの最高善解釈を詳論したものはほぼない。これが、本発表が上記の方法を採用する第一の理由である。第二に、エングストロームは最高善概念が理性から導出される過程の解明を試みる。この方針は、本発表が解明を目指す、いかにして徳と幸福の統一としての最高善が実践理性の目的となりうるかという第一の問いを検討するにふさわしい。また、理性から最高善が導出される過程を追うことによって、いかなる最高善概念が帰結するかもまた明らかになる。この点は、実践理性が義務として命じるのは、世界における最高善か、人格における最高善か、という本発表の第二の問いを検討するにもふさわしい。

従って本発表は、以上の方法に基づき、カントの最高善概念を解明することを目指す。

参考文献

- Aufderheide, J. & Bader, R. M. (eds.) (2015). *The Highest Good in Aristotle and Kant*.
- Beck, L. W. (1960). *A Commentary on Kant's Critique of Practical Reason*.
- Engstrom, S. (1992). "The Concept of the Highest Good in Kant's Moral Theory." In *Philosophy and Phenomenological Research: International Phenomenological Society*, 52 (4): 747-780.
- Engstrom, S. (1997). "Kant's Conception of Practical Wisdom." In *Kant-Studien* 88 (1):16-43.
- Engstrom, Stephen (2016). "The Determination of the Concept of the Highest Good." In *The Highest Good in Kant's Philosophy*, edited by Thomas Höwing, 89-108.
- Höwing, Thomas (ed.) (2016). *The Highest Good in Kant's Philosophy*.
- Korsgaard, Christine M. (1996). *Creating the Kingdom of Ends*.
- Payne, Charlton & Thorpe, Lucas (eds.) (2011). *Kant and the Concept of Community*.
- Pogge, Thomas W. (1997). "Kant on Ends and the Meaning of Life." In *Reclaiming the History of Ethics: Essays for John Rawls*, edited by Andrews Reath, Barbara Herman and Christine M. Korsgaard, 361-87.